

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 17 日現在

機関番号：34507

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21700643

研究課題名（和文） 指導の言説の構成過程と所産—指導の協働の可能性と問題—

研究課題名（英文） Processing developing biases and the results of remarks made during coaching: Possibilities and problems in cooperative coaching

研究代表者

梅崎 高行 (UMEZAKI TAKAYUKI)

甲南女子大学・人間科学部総合子ども学科・准教授

研究者番号：00350439

研究成果の概要（和文）：競技スポーツにおける指導の相互的なバイアス構成—指導者によるコーチングの偏りと選手による指導の歪んだ認知—に着目した。バイアス構成は、選手の学びと指導者の教えにブレーキをかける。この影響を最小にするため、第三者のかかわりについて検討した。とりわけ保護者については、従来から選手に対する過剰な働きかけが指摘される。錯覚とよばれるこうした働きかけを、脱錯覚的なものへと整える意義について議論された。

研究成果の概要（英文）：Development of mutual bias in coaching for competitive sports and distorted cognitions of athletes were investigated. Bias is detrimental to both coaching and for learning by athletes. In order to minimize this effect, interventions by third parties have been discussed. Especially, intense pressure from parents on athletes has been identified. Such interventions are an “illusion” and the significance of changing such illusions is discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学，1402 スポーツ科学

キーワード：競技スポーツ，教授学習過程，社会文化的視点，選手名を呼ぶ行為，相互的なバイアス構成，自己成就の予言，発達の機会としてのスポーツ，錯覚・脱錯覚

## 1. 研究開始当初の背景

梅崎（2010）では、サッカー指導における教授学習過程を、これまで競技スポーツの分析に際して用いられてきた Process - Product 的な視点に代わり、社会文化的な視点に立って検討した。選手に対する指導者の働きかけの内、主たる指導者（監督）による「選手名を呼ぶ行為」に焦点化した分析の結果、指導者の固定した働きかけが量的・質的に確認された。一方、選手を対象としたインタビューの分析から、指導者に対する評価もまた、選

手間で相互に構成され、固定されている可能性がうかがえた。ここから指導の問題は、単に指導者の責任に帰するよりもむしろ、場を構成する〔教える者 - 学ぶ者〕の相互行為の産物と捉える必要があると考えられた。以上を踏まえ、監督の他にコーチの発話も含めた分析を行ったところ、場の多声的な状況が〔教える者 - 学ぶ者〕の相互的なバイアス構成を回避する上で重要と考えられた。

## 2. 研究の目的

一連の研究では、梅崎（2010）で得られた課題に基づき、以下3本の調査が実施された。

(1) サッカーのトレーニングにおける相互的なバイアス構成の追跡的検討（梅崎、投稿中）

①〔指導者 - 選手〕間の相互的なバイアス構成は、他の指導実践においてもみられるのか

②相互的なバイアス構成が回避されることによって、指導者と選手にはどのような恩恵がもたらされるのか

(2) 指導者の期待と選手の自己成就的予言 - サッカー指導における教授学習過程を対象とした考察 - （梅崎、準備中）

競技スポーツには、トップアスリートの育成のみならず、生涯にわたってスポーツに親しむ健全な市民を育むことへの期待もある。

相互的なバイアス構成は、競技スポーツにおける自明の教授学習過程と言え、トップアスリートの育成を目指す仕組みと考えられる。反対に生涯スポーツのアスリートを育む点についてはドロップアウトなど、これがむしろネガティブに影響している可能性もみられる。

以上を踏まえ、次の仮説に基づくデータを収集し、これを検討することとした。

①指導者の固定した働きかけは、指導者による期待（選手評価）の偏りに基づく

②固定した働きかけは、選手のネガティブな自己成就的予言を生じさせる

③指導者による偏った期待と選手のネガティブな自己成就的予言（すなわち相互的なバイアス構成）は、チーム内の競争を停滞させるため、優れた戦績を残すチームではこれを回避する（勝つことと育てることを両立する）工夫がみられる

④③に示された特徴をもつ指導の分析によって、トップアスリートと生涯スポーツアスリートの、それぞれの育成を両立する指導について示唆を得ることができる

(3) 指導の実際から親役割を考える（梅崎・名取、準備中）

スポーツがもたらす恩恵として選手の心理発達を考えたとき、スポーツの主体である選手とこれにかかわる指導者はもちろん、場を多声的な状況にできる保護者の役割は小さくない。とくに選手が若年の場合、親役割は選手の人格形成の点からも適切さが求められる。相互的なバイアス構成が競技スポーツにおいて避け難い事象であるとして、いかにこのネガティブな影響を減じ得るかは、親役割にもかかっているとと言えるだろう。

ところがこうした期待に反し、親による選手への過剰なかかわりが、これまでも議論

されてきた。子どもをかわいいと思い、大人と同じような心性をもつ存在として過剰・過敏に働きかけてしまうのは、大人による「錯覚」と呼ばれる自然な行為であるとして、子どもが必要としていない場合に親は、子どもの自己性を尊重した「脱錯覚」的なかわりが求められる。これはスポーツ文脈でも同様に違いない。

本研究では、しばしば相互的なバイアス構成が確認される競技サッカーチーム（Jリーグ所属クラブ下部組織）を対象として、とりわけ児童期を過ごす選手に必要な親役割について議論する。収集されたデータから、以下の検討を行う。

①親子の間ではしばしば、スポーツの捉え方に認識のズレがみられる。この解消を目指した親子のコミュニケーションはいかに展開し得るか

②バイアス構成のみられる指導は子どもの発達を阻害するものと位置づけられる。これを緩衝する親役割、ならびに親と指導者の協働的關係とはどのようなものと考えられるか

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査対象と調査期間

3 調査とも梅崎（2010）で用いられた方法が踏襲された。すべての調査においてJリーグ所属クラブ下部組織に当たる中学生または小学生年代のチームが対象とされた（表1）。

調査	チーム	主たる指導者	選手	地域	期間
(1)	Yチーム	C監督	中学生、27名	Y市	200X+1年1月～12月（月1回）
(2)	Zチーム	Dコーチ	中学生、17名	N市	200X+2年2、5、7、9、11月（金～日の連続した3日間）
(3)		E監督	小学生、16名	N市	200X+3年7月第4週金～日

調査(1)及び(2)では、梅崎（2010）との結果比較に適していると考えられた対象

表2 指導者の発話（コーチング）の分析カテゴリ

カテゴリ	説明	実際のコーチング例(調査(3)より)
1 ポジティブ	〔褒め・励まし〕, 〔褒め〕	おお、ナイスボール、オオヤ/おー、背中取ったー、シノダ/おおナイス、ワタナベいいんだよ、見てるところ
2 ネガティブ	〔叱り〕, 〔否定〕, 〔あやするなこうするな〕	ニトウ、お前いいかげんせえよお前、さっきからー/適当過ぎるよ、ヒラシマ/いや俺からしたらミネギシがミネギシがここで下げる意味が分からん
3 直接的	〔あしろうしろ〕, 〔注意喚起〕	オカガワ、もう1コ前にポジションとって/出ろ出る出るミヤザワ/ニトウ、集中!
4 間接的	〔強調〕	じゃあタカジョウはどうしよう? /タナベ今ミヤザワ何した? /オカヤ、その足下のパスは何? どういう意図?
5 統制的	〔指示〕, 〔ジャッジ〕, 〔メンバー発表〕	オオシマ、来たときにさ黄色いピブスを、3枚持ってきて/イタノボール/イタノー、カシワギー、最初キーパー入ろう
6 親和的	〔コミュニケーション〕, 〔かわらあい〕, 〔ケガ対策〕	オウケーストレッチ、タナベボール二つ持たないで/タナベイエローカード/（誰れは）とれた、ミネギシ?
7 その他	〔雑談〕, 〔本人不在の発話中の呼称〕	タモンさん、コジマ来た/えーさっきマエダにも百ったけどな

が選択された。また調査 (3) では、親がとるべき「錯覚」と「脱錯覚」のバランスに、中学生年代と比べてより繊細さが求められる小学生年代が対象とされた。調査 (3) では、先行研究がデータ収集にほぼ一年を費やしたのに対し、現場に対する短期間でのフィードバックを目指して、調査期間が短く設定された。

## (2) データ収集方法

指導者には IC レコーダーおよびワイヤレスマイクの装着が依頼された。記録された指導中の発話はすべて逐語化され、ここから選手名を呼ぶ発話が抽出された。抽出された発話は調査 (1) から順に、1,519, 5,073, 740 であった。

梅崎 (2010) では、この発話を分類するのに適当と考えられたカテゴリがボトムアップ的に準備された。本研究でも同カテゴリが援用され、調査協力者とともに分類が進められた (表 2)。二者がそれぞれ単独で分類を行った後に、結果照合を実施した。一致度を算出した  $\kappa$  係数は、調査 (3) で 0.88 という高い値であった。意見の相違がみられた箇所は、二者間で議論を行いカテゴリを付与した。決定された各調査 (各指導者) の発話の内訳は、表 3 に示されるとおりであった。

表3 各調査における発話 (コーチング) の割合

カテゴリ	説明	調査 (1) の割合 (度数)	調査 (2) の割合 (度数)	調査 (3) の割合 (度数)
1 ポジティブ	【褒め・励まし】、【慰い】	6.4 (97)	6.6 (335)	19.1 (141)
2 ネガティブ	【叱り】、【否定】、【あはするなこうするな】	11.5 (174)	16.1 (816)	9.1 (67)
3 直接的	【あはしるこうしる】、【注意喚起】	29.3 (445)	41.6 (2,112)	13.2 (98)
4 間接的	【激励】	7.6 (115)	7.1 (358)	16.6 (123)
5 統制的	【指示】、【ジャッジ】、【メンバー発表】	26.3 (400)	16.0 (811)	25.1 (186)
6 温情的	【コミュニケーション】、【からかい】、【タガ寄せ】	4.8 (73)	1.8 (92)	3.4 (25)
7 その他	【雑談】、【当人不在の発話中の呼称】	14.2 (215)	10.8 (549)	13.5 (100)
合計		100 (1,519)	100 (5,703)	100 (740)

## 4. 研究成果

3 本の研究目的に照らし、データの分析から得られた示唆をそれぞれ述べる。次いで総合考察と今後の研究課題についてまとめる。

### (1) サッカーのトレーニングにおける相互

表4 各層に対するコーチングの種類 (割合・カテゴリ別)

	「評価」		「示唆」		「声かけ」			合計
	(a) ポジティブ	(b) ネガティブ	(c) 直接的	(d) 間接的	(e) 統制的	(f) 温情的	(g) その他	
指導者	13	36	104	28	86	15	51	333
%	3.9	10.8	31.2	8.4	25.8	4.5	15.3	100
中継者	40	87	156	43	139	32	86	583
%	6.9	14.9	26.8	7.4	23.8	5.5	14.8	100
選手層	44	51	185	44	175	26	78	603
%	7.3	8.5	30.7	7.3	29.0	4.3	12.9	100
全体	97	178	445	115	400	73	215	1,519
%	6.39	11.5	29.3 Δ	7.57	26.33 Δ	4.81	14.15 Δ	100

注 (1) 割合は総数に占める割合を示す。本研究では評価の割合が層別に異なる。中継者、選手層、指導者の割合は、(a) Δは25%未満で有意に異なるコーチングの種類を示す。

的なバイアス構成の追跡的検討

①相互的なバイアス構成は、他の指導実践においてもみられるのか

梅崎 (2010) でみられた相互的なバイアス構成は、本研究では確認されなかった (表 4)。因果の解釈には慎重となるべきであるが、戦績において Y チームは梅崎 (2010) で対象とされたチームを上回ったことから、バイアス構成の有無がチームの成否に影響する可能性が示唆された。

②相互的なバイアス構成の回避によって、どのような恩恵もたらされるのか

梅崎 (2010) でみられた、選手による指導 (者) の歪んだ認知も、本研究ではみられなかった。シーズンの中盤において個人差が拡大した選手の動機づけ値は、シーズン終了時に一様に高い水準を示した。ただしこの結果についても、動機づけが高まったから勝ったというよりもむしろ、勝つことによって動機づけが高まり、安定的な指導 (者) 評価がなされたという解釈の方が妥当のようにも思われる。知見の蓄積による解釈が求められる。

以上①②の結果について発話の質的分析によると、梅崎 (2010) で対象とされたチームが「フリーズ (ダイナミックに活動する選手の動きを止めて行うコーチング技法) + [発問] コーチング」によって、各選手に対するかかわりの特定性 (偏り) を際立たせていたのに対し、Y チームではこれがみられなかった。このことについて C 監督に振り返りを求めたところ、選手に退屈されるというネガティブなできごとが過去にあり、その原因を自らの偏った働きかけに求め、反省・改善した結果であるとの説明がなされた。

総合すると Y チームの指導は、特定の選手に対する固定した働きかけを回避すると同時に、すべての選手が (文字どおり) 必要とされる内容構成によって、個の育成とチームの勝利との両立が目指されるものであると考えられた。トレーニング環境の制約のなかで、バイアス構成のネガティブな顕在化を回避するようにデザインされた Y チームの指導は、育てることと勝つことのいずれを優先するかという議論がしばしば持ち上がる指導現場にとって、示唆的であると思われる。

(2) 指導者の期待と選手の自己成就的予言 - サッカー指導における教授学習過程を対象とした考察 -

Z チームと、先行する 2 つの調査対象チーム (Y チームならびに梅崎 (2010) で調査対象とされたチーム) との違いは、Z チームがクラブにおける中学生年代のチームのセカンドチームに相当したのに対し、他の 2 チー

ムがトップチームであった点である。したがってZチームでは、他の2チームに比べて幾分「勝利」志向が弱く、力点をより「育成」におきやすい特徴をもつと考えられた。ここからZチームを対象とした分析によって、先述した研究目的③および④に対する示唆が得られるもの期待された（下記再掲）。このことは、競技スポーツにおいて相互的なバイアス構成が一般的に回避し難い事象であるとした場合に、これに付随して生起する選手のネガティブな自己成就的予言を回避する上でも示唆をもつと考えられた。

③指導者による偏った期待と選手のネガティブな自己成就的予言は、チーム内の競争を停滞させるため、優れた戦績を残すチームではこれを回避する工夫がみられる

④③に示された特徴をもつ指導の分析によって、トップアスリートと生涯スポーツアスリートの、それぞれの育成を両立する指導について示唆を得ることができる

先行研究を踏襲し、指導者による選手評価をもとに、3グループで選手を把握した。各グループに対する働きかけの頻度と内容について比較したところ、チームの中核を成す第2グループ（中位評価グループ）への働きかけ頻度が高く、[ああしろこうしろ]コーチングが多用されていた。フリーズ時以外にも、図1、図2に示すように第1グループ（上位評価グループ）不在時にこの特徴が際立ち、働きかけのこうした偏りは、競争によって一人でも多くのプロを育てようとするクラブの存在意義（最優先課題）が反映されたものと考えられた。

また、選手に対する質問紙調査の統計的な分析によってこうした働きかけに対する選手の反応をみたところ、Zチームでは、働きかけの偏りに対する自己成就的予言がネガティブに顕在化した状態であるとは言えなかった。しかしながら、シーズンの深まりとともに働きかけの頻度および内容に比して選手間に心理状態（動機づけの高低など）で格差もみられ、自明視される競技スポーツの

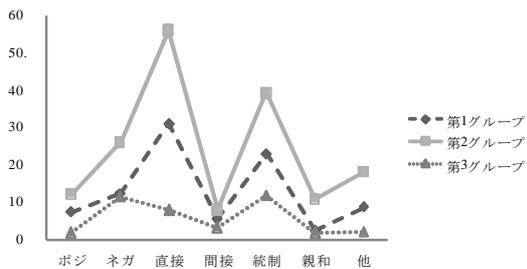


図1 通常時の働きかけ頻度

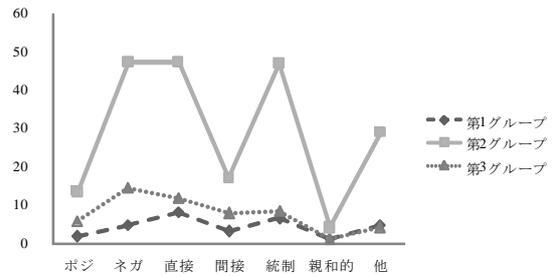


図2 第1グループ不在時の働きかけ頻度

教授学習過程は、とりわけ児童期・青年期を生きる選手にとって心理的にネガティブな影響が考えられた。

(3) 指導の実際から親役割を考える

子育ての課題とされる「脱錯覚」の視点を競技スポーツ文脈に敷衍して議論を行った。親の過剰なかかわりが指摘されるスポーツ文脈において、「錯覚」と「脱錯覚」のバランスはいかにあるべきか。競技に対する認識に、子どもと親とでズレもみられるなか、子どもが直面する現実世界一相互的なバイアス構成のなかで不適応的な自己認知に陥っている一を出発点として議論を始めることが、この影響を最小とし、親子の脱錯覚的コミュニケーションおよび親と指導者の協働

表5 評価群×コーチング内容のクロス表

指導者による評価	選手名	コーチング内容							合計	平均コーチング数
		ポジティブ	ネガティブ	直接的	間接的	統制的	親和的	その他		
低群	マユダ	5	5	3	6	10	0	2	31	35.8
	オオシマ	12	0	1	0	14	0	1	28	
	タナベ	11	2	5	4	13	3	3	41	
	ナカヤ	8	2	8	10	13	0	2	43	
	オオヤ	13	5	6	6	9	5	6	50	
中群	シノダ	7	2	6	8	16	0	8	47	43.2
	カシワギ	9	0	5	7	16	2	8	47	
	タカジョウ	3	6	3	15	10	1	5	43	
	イタノ	12	3	0	2	13	4	4	38	
	ヒラヤマ	10	5	2	4	10	1	2	34	
高群	コジマ	13	3	5	10	14	1	10	56	56.3
	ワタナベ	10	8	10	21	12	0	13	74	
	ニトウ	3	6	11	10	10	0	9	49	
	ミヤギワ	8	0	10	8	4	3	5	38	
	ナカガワ	8	6	11	4	11	2	13	55	
ミネギシ	9	14	12	8	11	3	9	66		

注 選手名はすべて仮名

を目指す上で有効と考えられた。

指導実践における指導者の発話分析の結果、プロサッカークラブでは選手の能力評価に応じた、言い換えれば指導者の期待を反映した指導が明確になされており(表5, 図3)、プロサッカー選手を目指しながら子どもたちは、(1) 評価が高い場合に、その期待に対する圧力に、(2) 評価が低い場合に、入団以前の自己に対する周囲の高い評価とのギャップに、それぞれ葛藤を生じさせていると予想された。

これを踏まえどの親も共通して脱錯覚を子育ての第一課題としながら、子どもが必要を訴えた場合に、個別的で情緒的な対応が求められることを確認した。成体(完成系)を想定したこれまでの年齢・段階的な発達観を越え、スポーツをとおした全人格的な発達を

議論すべく、親を子育ての主体として定位することの重要性が議論された。

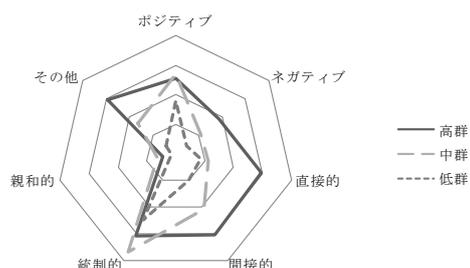


図3 コーチング内容の割合

#### (4) 総合考察と今後の研究課題

一連の研究では、相互的なバイアスが競技スポーツ文脈において自明のうちに構成される現実に着目した。このことが直接的には、生涯スポーツのアスリートとしての選手育成、言い換えれば、児童期・青年期を生きる子どもたちの心理発達にネガティブな影響をもたらすと考えられることから、そのような〔選手—(主たる)指導者〕関係を緩衝できる人物として、親ならびにサポートコーチに目を向けた。このうち親役割については、とりわけ選手が若年の場合に「錯覚」・「脱錯覚」バランスをとることの重要性が議論され、今後、具体的な親子関係を対象とした調査の必要性が確認された。

一方、相互的なバイアス構成の影響としては、チーム内の健全な競争を停滞させると考えられることから、トップアスリートの育成にとっても長期的には、ポジティブな影響を与えないと考えられた。このことについて自覚的なチームでは、相互的なバイアス構成を回避しつつ、勝つことと育てることの両立に取り組み、結果として優れた戦績を残していると予想された。一連の調査においてこの仮説を支持する一致した結果を得ることはできなかったが、部分的にこれを示唆する結果—相互的なバイアス構成のないチームにおいて、それがあつたチームと比べた場合に、より優れた実績が残された—がみられ、指導の両義性を打破する指導実践を対象とした調査の継続が求められると考えられた。このとき、相互的なバイアス構成の一般化や、また、生涯スポーツアスリートとしての選手の心理発達に目を向け、一連の調査で採用された事例研究ではなく、長期縦断的かつ量的調査によって様々な文脈条件の比較検討が必要と考えられた。

さらに、現場へのフィードバック(協力チームや指導者への貢献)を考えた場合に、一

シーズン—シーズンが勝負とされる競技スポーツの現場に対し迅速なフィードバックが欠かせない。そこで信頼性や妥当性を備えた指導傾向の、最短期間での把握を可能とするような調査についても方法を検討していく必要がある。この点について調査(3)では、練習と試合を含む3日間4回の調査結果からこの可能性が示され、現場との協働に向けて引き続き試行が求められている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

- ① 梅崎高行、サッカー指導における相互的なバイアス構成の検討、教育心理学研究、査読有、第58巻、(2010)、298-312

〔学会発表〕(計10件)

- ① 梅崎高行・名取洋典、指導者の期待と選手の自己成就の予言、第53回日本教育心理学会、2011. 7. 24-26、北翔大学
- ② 梅崎高行、バイアス構成の回避を意図したアクションリサーチの効果—サッカー指導者を対象として—、日本発達心理学会 Social Motivation 研究分科会 関東動機づけ研究会(2011年度4月例会)、2011. 4. 9、早稲田大学
- ③ 梅崎高行、サッカー指導にみられる偏りの追従的検討(4)、第37回日本スポーツ心理学会、2010. 11. 20-21、福山大学
- ④ 梅崎高行、サッカー指導における動機づけの構成—関係論的視点からの検討—、第37回日本スポーツ心理学会、2010. 11. 20-21、福山大学
- ⑤ 梅崎高行・名取洋典、サッカー指導にみられる偏りの追従的検討(2)—偏りを回避する協働の「物語」・「科学的根拠」、第74回日本心理学会、2010. 9. 20-22、大阪大学
- ⑥ 梅崎高行、サッカー指導におけるクロスロード 終わらない対話、第74回日本心理学会、2010. 9. 20-22、大阪大学
- ⑦ 梅崎高行・名取洋典、サッカー指導にみられる偏りの追従的検討(1)、第52回日本教育心理学会、2010. 8. 27-29、早稲田大学
- ⑧ 梅崎高行・名取洋典、サッカー指導にみ

られる偏りの追従的検討 (3)、第8回スポーツ動機づけ研究会、2010. 5. 29-30、名古屋大学

- ⑨ UMEZAKI TAKAYUKI、Construction process of coach' s narrative: The possibility and problem of coach' s cooperation、The 12th International society of sports psychology World Congress of sport psychology、2009. 6. 17-21、Marrakesh
- ⑩ 梅崎高行、サッカー指導における指導の相互バイアスの構成、第7回スポーツ動機づけ研究会、2009. 5. 30-31、名古屋大学

[図書] (計1件)

- ① 梅崎高行・遠山孝司・名取洋典・荒井弘和・松本裕史、金子書房、Chapter11 スポーツ心理学 1. スポーツ心理学における動機づけ 2. コーチング 3. チームビルディング 4. 心理的スキルトレーニング 5. 身体活動の開始と継続、上淵寿 (編著) 動機づけ心理学 キーワード、印刷中、頁数未定

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

梅崎 高行 (UMEZAKI TAKAYUKI)

甲南女子大学・人間科学部総合子ども学科・准教授

研究者番号：00350439